

## 第4章 飛躍の訓子府（町制施行から開基100年）

### 第1節 待望の町制施行

#### ■町制施行記念行事盛大に

昭和26年（1951年）は、11月の町制施行とその後の飛躍をめざし、さまざまな事業が行われた。懸案の役場庁舎は、鉄筋コンクリート造、公民館は旧庁舎を移転改築した。この役場庁舎は、当時としては村一番の堂々たる偉容を誇っていたのである。

◇「昭和24年に役場に入った。同26年、新しい庁舎を現在の歴史館のところに建てているとき、当時の谷本村長が『自分たちが働くところは、自分たちでという気持ちを表せ』と、建設作業に職員を出役させた。型枠にコンクリートを流し込んだあとに、コンクリートの空気を抜いて早く固まるように型枠を金づちで懸命にたたいた記憶がある」

（四十物義雄・元助役談 栄町在住）

町制は、この年11月1日付けで施行された。町制調査による7月1日現在の人口が1万925人、1,807戸だった。

庁舎落成と公民館開館記念を併せた式典と祝賀行事が12月1日から繰り広げられ、町制記念として町章が制定されたほか、「訓子府音頭、訓子府小唄」のレコードがつくられ、「新生訓子府町」として新たな理想郷をめざし、輝かしいスタートを切ったのである。

◇「今、道議会で、訓子府村を町にすることが議決されました」と、谷本泰三郎村長さん

と後藤鐵雄村議会議長さんのお供をして道議会の傍聴席で、議決の瞬間を見ていた佐藤忠義（村の教育係長兼村議会議書記）が直ちに村役場で待機していた池岡正俊助役さんに電話でこのことをお伝えしました【昭和26年9月30日午後5時ごろ】。村から町になる条件としては、おおむね人口は1万人以上、市街地の連なる戸数は600戸以上が必要でした。人口はパスですが、戸数約1, 800戸のどこまでが市街地として認められるのかと心配しました。

（佐藤忠義・元町長寄稿 若がえり学級文集2012年版より）

### ■村・村議会から町・町議会に

昭和22年（1947年）の地方自治法施行で、村会が村議会に、村会議員は村議会議員と呼ばれるようになった。

同26年（1951年）4月23日、分村して2期目の村政を担う、村長、村議会議員選挙が行われた。同年の村制から町制への移行に伴い、村長は町長に、村議会議員は町議会議員となり、谷本村長が初代町長となった。以後、平成19年（2007年）までは、4人の町長が町政を担った。

執行機関は、町のほかに教育委員会（昭和27年設置）、選挙管理委員会（同21年設置）、公平委員会（同26年設置、同42年4月1日に「網走支庁管内Ⅱ現オホーツクⅡ町村公平委員会規約」が施行され、公平委員会事務を共同処理することになり、同年公平委員会設置条例が廃止された）、監査委員（同27年設置）、固定資産評価審査委員会（同26年設置）が設置され、

それぞれの法律で定められた業務を行った。また、農業者等の代表で構成する行政機関として農業委員会が同26年に設置されたのである。

議会は、役場庁舎の2階に設置された議場で論戦を重ねた。同22年から続いていた定数22人を、同50年（1975年）に2人減の20人に、同62年（1987年）選挙からは4人減の16人に削減したのである。

平成3年（1991年）の町議選は、本町では初の無投票となった。

昭和から平成へと時代が進み、町もハード・ソフト両面で充実発展してきたが、人口減など町の財政も厳しい時代となり、昭和61年（1986年）に行政改革大綱を定めるなど各種改革を進めながら21世紀へのまちづくりが進んでいったのである。

#### ○谷本町政（昭和22年から同42年）

新しい地方自治制度のもと、初の公選首長となった谷本泰三郎は、5期20年町長（村長含む）を務めた。町制施行から半年後の昭和27年（1952年）4月15日に発行された「訓子府町弘報」創刊号では、「懸案だった役場庁舎、公民館の新築実現により、教育施設整備、電力増強による農業、酪農業など総合的産業の振興、道立北見農業試験場（現地方独立行政法人北海道立総合研究機構北見農業試験場）の誘致をめざす」ことなどが記されている。

このうち北見農業試験場の誘致では、谷本は期成会を組織して幅広い運動を展開、北見市、美幌町との三つ巴の争いを制し、同34年（1959年）に移転全面完成の運びとなった。

また谷本は、5期目の後半2年間は、土地基盤整備や農業機械化、共同利用模範牧場整備

など農業構造改善事業を中心とした産業振興、郊外地区の道路整備や農村電気施設の更新、農村電話の新設など生活基盤の整備、さらに中学校の統合および新校舎、体育館の建設など人づくり対策に力を注ぎ、町として大きく発展する基盤を確立していったのである。

谷本は、同42年（1967年）6月、町初の名誉町民となった。

◇「祖父・谷本泰三郎は、千葉県生まれ、税務署員、警察官を経て、丸玉鈴木商工（株）Ⅱ付牛村本社Ⅱの湧別工場に入り、大正10年に同社訓子府農場の支配人として訓子府に来ている。現在の緑丘、実郷、大谷に至る広い農場が丸玉農場だった。初めのころは、緑丘の元水源地辺りに住んでいた。議員や村（町）長、産業組合長や森林組合長を辞めた後、北見方面公安委員会委員も務めた。いろいろな組織のリーダーを務めていたが、産業組合時代には、開拓者の開墾作業を手伝うなど面倒見が良く、几帳面な人だった。私自身は、小学生時代、町長公宅に毎日牛乳を届け、可愛がられた」

（谷本泰三郎の孫・谷本茂樹さん談 清住在住）

町などは、同41年（1966年）に開基70年・町制施行15年の節目を祝い、花火大会や仮装大パレードなどの記念事業を繰り広げた。



開基70年記念招魂祭の協賛事業として行われた町ばんば振興会のばんえい競馬（奥原良孝さん提供）

## ○渡邊町政（昭和42年から同54年）

渡邊義夫は、3期12年にわたり町政を担った。2期目までは谷本町政を手堅く継承しつつ、3期目の昭和50年代からは、第一次オイルショック（昭和48年～同49年）の影響から経費の節減、合理化を進めながらもまちづくりを着実に振興させていった。

共同利用模範牧場の開設、玉ねぎ生産出荷近代化計画推進などの産業振興をはじめ、企業の運転・設備資金融資枠の拡大、生活困窮世帯への医療費扶助、道路の舗装化、公営住宅建設や穂波団地の造成などの住宅施策、訓子府高校の施設整備、町営バスの運行など多岐分野にわたり町政を推進。さらにホクレンくみあい飼料工場の誘致にも尽力した。

一方で、昭和47年（1972年）に、本町の未来像を「緑あふれる酪農郷の建設へ」とする初めての総合計画を策定し、計画的なまちづくりを推進。同50年（1975年）からは、将来をにらんだ施策を展開。福祉施策の充実で「思いやりの深い町づくり」や「健康で住みよいまちづくり」を展開、スポーツセンターや訓子府大橋も完成させた。

渡邊は、同56年（1981年）10月3日に名誉町民となった。

◇「父・渡邊義夫は、昭和30年から町議会議員、33年から訓子府農協の組合長を務めていた。同38年から3年間は、ホクレン農業協同組合連合会常務理事も務めていた。42年4月の町長選挙に出てほしいとの話があったとき、農業協同組合連合会の会長という話もあった。たよつで、本人は相当悩んでいたが、『訓子府にお世話になっている、町民のために尽くすことは名誉なこと』と選挙に出た。町長になってからは、共同利用模範牧場の開設

に一生懸命だった。道有林の払い下げのため走り回っていた。優しい父親ではあったが、訓子府小学校の統合を手掛けたときに、統合には賛否両論あり、家族もいろいろ言われ、町長職の大変さを感じた」  
(渡邊義夫の三男・渡邊守彦さん談 福野在住)

町は、同45年(1970年)に町民憲章制定、同52年(1977年)には開基80周年記念で、町花「エゾムラサキツツジ」、町木に「オンコ」を制定した。

### ○佐藤町政(昭和54年から平成3年)

佐藤忠義は、産業振興のほか生活環境の確立、教育文化の振興と福祉の展開などを柱に掲げ、3期12年間にわたり町政を推進。昭和55年(1980年)には学校給食センターを建設、翌56年(1981年)には、日出地域に初の公営住宅を建設した。昭和57年(1982年)には新しい公民館、同59年(1984年)には新しい図書館(いずれも現在の施設)を手掛けた。特に図書館はこの後、図書貸出率が全国一を記録するなど読書熱の高い町として注目を集めたのである。

さらに道路の舗装化や農道整備、農村総合整備モデル事業など農業基盤整備も進め、同61年(1986年)には公民館に隣接して農村環境改善センターを開館させた。同年からはレクリエーション公園の整備に着手、平成元年(1989年)から下水道事業にも着手し、同2年(1990年)には特別養護老人ホーム「くねねつぶ静寿園」の開所にこぎ着けた。また平成元年に温泉ボーリングが成功したことにより、同3年(1991年)に温泉保養センターをオープンさせ、町民の憩い、くつろぎの場をつくったのである。

◇「佐藤元町長の人柄は、真面目で、すごくバイタリティーにあふれていた。地方自治について詳しくかった。仕事に対しては厳しかったが、プライベートでは気さくな人だった。昭和34年7月から約1年半、北海道町村議会議長会の主事として派遣された。同議長会には道職員も派遣されており、そこで道との人脈をつくり、後年さまざまな事業等で道との人脈を活用したように思う。教育長経験を生かし、町長となって居武士小学校の新築や訓子府小学校の給食センター建設などを手掛けた。特に訓小の給食センターの2階部分で全校児童が一緒に給食を食べるユニークな食堂方式を採用し、注目を集めた。苦勞していたのは、温泉掘削で、北海道地下資源調査所の許可を得るために、道の人脈を生かしながら、何度も要請活動を行い、ようやく調査と掘削の許可が出たが、当初の予定より湯脈が深く、補正予算を組んで掘削した。掘って出ないでは済まされない状況だった。基本構想まで作り、結局立ち消えになったのが「農業遊学ゾーン構想」。農業関連施設、研究施設を有機的に結び付けて北海道農業を広く知ってもらう体験の場にして町の活性化につなげようと町長は考え進めたが、立ち消えとなった。まちづくりの構想（夢）をもってそれを心の支えとし、まちづくりを進めていた人だった」

（山田稔・元助役談 旭町在住）

昭和61年（1986年）11月1日には、町開基90年記念式典が行われ、中央公園にタイムカプセルが埋設されるなど、10年後の開基100年に向けたまちづくりがスタートした。

## ○深見町政（平成3年から同19年）

深見定雄は、4期16年町制を担ったが、平成3年（1991年）に当選後の6月定例議会  
で5年後の同8年（1996年）に迫った町開基100年をにらみ、21世紀に向けたまちづ  
くりを掲げ、各分野での施策を展開。道路や公園、下水道の整備をさらにレベルアップした  
街空間を整備したのである。

同6年（1994年）に策定した「市街地整備基本構想」を基に、21世紀のまちづくりに  
ふさわしい事業を検討。市街地の道路や緑空間の整備を打ち出した。開基100年記念事業  
の一つでもある、新叶橋への架け替えをはじめ、市街地の道路拡幅、歩道整備、電線類の地  
中化などを進め、商店街協同組合が進めた商店街の近代化事業と合わせ、同14年度（200  
2年度）には街並みが一新した。

同5年（1993年）には、町内初の若年単身勤労者住宅を建設、同7年（1995年）  
には町営温水プール「KAPPA」（カップ）がオープン、同8年と同11年（1999年）  
には人口流出歯止め策の一環として末広町と日出町に住宅団地「あけぼの団地」、「あさひ野  
団地」をそれぞれ造成、分譲。同12年（2000年）に訓子府駅舎を含めた農業交流センタ  
ー、同13年（2001年）に役場庁舎を建設した。

役場内部においては、同3年（1991年）7月に「町民の声をきく課」（現町民課）を  
新たに設置、町民相談係、広報住民活動係、防災係の3係で構成し、町民の相談、要望、苦  
情などを受ける窓口を一本化したのである。

◇「開基100年の平成8年に完成した新叶橋が一番印象に残っている。現在の道道北見白糠線の区域を一部変更して常呂川に架けられた訓子府大橋が昭和53年に完成したことで、旧叶橋との距離が近いことなどから、叶橋の架け替えは厳しいとされていた。老朽化が著しく、町のシンボルとして河川公園を一望できるバルコニーを備えた魅力ある橋にしたいと、国や道に盛んに要請活動を行い、新しい橋への架け替えが実現した。町長引退後、10年間ほどは、橋の掃除を毎日続けていた思い入れのある橋だ。このほか、電柱、電線類を地上からなくした街並み整備事業や温水プールの建設などが強く印象に残っている」

（深見定雄・元町長談 東町在住）

## 第2節 市街地・農村地域大きく発展

### ■字名改正

野付牛村時代に「部落制度」が敷かれていた訓子府は、「訓子府村」になってからの昭和16年（1941年）の字名改正で、地域ごとに字名が新しく付けられた。その字名は訓子府（市街地）と福野、日出、柏丘、穂波、弥生、高園、駒里、北栄、西富、大谷、実郷、緑丘、開盛、清住、豊坂、常盤の16の農村地域。

また、同28年（1953年）からは、市街地に字名とは別に通称の町名を付け、幸町、東町、旭町、元町、大町、仲町、栄町、若富町、末広町の九つの町名が付けられた。農村地域は、一部地域の分割、名称変更等で、穂波、柏丘、日出、大谷、実郷、緑丘、開盛、協成、

常盤、豊坂、清住、西富、北栄、駒里、弥生、福野、高園、美園の18区域・名称となった。

市街地区の発展に伴い、市街地区の「字訓子府」は九つの町内会にまたがることなどから、町は、昭和62年（1987年）10月に字名・地番の改正を行った。その内容の大きなものは、①現在の「字訓子府」は廃止し、分割して新たに「町名」に変える②「町名」は、町民に親しまれている町内会名とする―などであった。

### ■実践会と町内会

大正9年（1920年）の分村から昭和30年代後半にかけて、人口および世帯数が伸び、市街地区、農村地区共に発展してきた。

昭和33年（1958年）1月から農村地域の自主的な活動を促進するため、行政区と農事組合が統合となり、自主的生産活動と行政の協力機関として1区域1実践会となり、区域の数同様18実践会となった。また、市街地の農業者による、農事組合に代わる中央実践会が組織された。さらに農事実践会は、横の連絡調整と活動の相互協力のため連絡協議会を組織した。

一方、市街地は、九つの行政区を同年4月に町内会と名称を改め、さらに日出の市街地に日出町内会が組織され、その連合町内会を同34年（1959年）に町内会連絡協議会と改めた。

町内会連協ができた年の9月末人口は1万1,331人（1,838世帯）と町の発展がみられる。幸町は、同44年（1969年）に「東幸町」と「西幸町」に分割、同62年（19

87年)には若富町から分割され「若葉町」となり、平成4年(1992年)には「若葉町内会」が誕生。同30年(2018年)には行政区(町内会)の仲町が栄町と統合した。美園実践会は昭和64年(1989年)に常盤と合併、平成13年(2001年)には「農事実践会」が「実践会」に改められたのである。

### 第3節 道立高校誕生、温水プールオープン

#### ■小、中学校の統合、訓高の道立移管

町制施行から平成の初めまでの学校教育の大きな動きは、まず訓子府高校の道立移管である。北見高等学校(現北見北斗高校)の分校として昭和23年(1948年)に創立した訓高は、同27年(1952年)に町立で運営され、同37年(1962年)昼間定時制学級設置、同38年(1963年)昼間季節制普通科一問口が認可、この普通科が同41年(1966年)に農業科となり、農業者の育成などを中心に教育を充実させた。

その後、時代の流れとともに同49年度(1974年度)から全日制普通科に学科転換され、さらに同51年(1976年)に待望の「北海道立」となり、平成6年(1994年)に現校舎などが完成したのである。

また、昭和22年(1947年)の学校教育法公布により、新学制となり、国民学校が「小学校」、高等科が中学校となった。同年5月1日に訓子府中学校が小学校舎の一部を借り、8学級で開校。同23年(1948年)に独立校舎の一部が完成したが、生徒数の増加で同24

年（1949年）に増築、14学級となった。独立校舎が全面完成した同25年（1950年）から12年間は、高校分校が「同居」していた。

その後、町内には同28年（1953年）までに南訓（校区Ⅱ豊坂、常盤）、中ノ沢（校区Ⅱ福野、弥生）、美園（校区Ⅱ美園）、北訓（校区Ⅱ北栄、駒里）各中学校が開校したが、同48年（1973年）までにすべて訓中に統合された。同41年（1966年）に完成した統合校舎に、統合と同時に各地区に運行されたスクールバスで通学。スクールバスは当初、北見バスの運行を予定していたが、実現せず町がバスを購入し生徒の送迎を行った。この統合校舎は、平成5年（1993年）に完成した現校舎へと移っていったのである。

昭和30年代に1万1,000人台を維持していた町の人口は、同38年（1963年）ころからの離農などで、同45年（1970年）の国勢調査（10月1日現在）では8,517人と大幅に減少し、特に農村部では市街地に比べ人口の減少度合いが大きく、農村地域の各小学校でも児童数が減少し、訓小への統合へと進んだのである。

大正時代に教授場として開校した北訓小、南訓小が同47年（1972年）に、中ノ沢小は翌48年にそれぞれ訓小に統合となり、昭和22年（1947年）に訓小の分校としてスタートした美園と緑丘は、その後小学校となり、緑丘小は同48年、美園小は同50年（1975年）に統合されたのである。訓小の統合校舎は、同49年（1974年）に全面完成し、平成6年（1994年）から同8年（1996年）にかけて大規模改修を行ったあと、耐震診断結果を踏まえ、同19年（2007年）に校舎の、同22年（2010年）に体育館の耐震補強工事を

を行った。

現居武士小学校は、昭和22年に国民学校から村立居武士小学校と改称、このころから日出地区の発展がめざましく児童数が増加、同24年（1949年）には186人となった。その後、地域と共に発展してきた居武士小は、同55年（1980年）に現校舎を建設、平成11年（1999年）には食堂が新築された。

この食堂は、同14年（2002年）6月に落雷により一部焼失したが、すぐに修復した。さらに同22年には体育館の耐震補強工事を行った。

※昭和21年の戦後開拓で17戸（第1次）が入植した美園地区は、子どもたちも多く「学校が必要である」と地域が村などに要望し、翌年分校が開校、同時に樺太（サハリン）から引き揚げてきた主任の先生と一緒に納谷幸喜（後の大相撲横綱・大鵬）一家も美園に居住した。

◇「小学校1年の時、納谷くんが2年か3年生で、私たち家族が住んでいた3軒長屋の風呂によく入りにきた。肌の白い子だった。あの子が大鵬ということは私が大人になつてから知り、結婚後にテレビを購入したらすぐに大相撲を見て応援した」

（中野洋子さん談 美園在住）

## ■乳幼児の保育・教育関係

乳幼児保育・教育等関係では、昭和30年代後半から町立の幼稚園設置の動きが父母らの間から起こり、同50年（1975年）から教育委員会が調査、設置準備を進め、同53年（1978年）に前年完成した園舎で入園式が行われた。初年度、5歳児4学級約120人が通園

した。

また、保育所関係では、同28年（1953年）に常照寺が寺を開放し、季節保育所を開設したのが始まり。その後、同35年（1960年）に町の常設保育所が開設され、同年に隣接して訓子府季節保育所を開設。さらに末広、鉄北、日出へき地、北訓へき地、中ノ沢へき地保育所が次々開所したが、同60年代から平成に入り、児童数の減少により、季節保育所と鉄北保育所が合併、平成7年度（1995年度）から末広、北訓両へき地保育所が廃止となり、同年に「くんねつぶ保育園」（常設・平成28年閉園）、「あさひ保育園」（季節・平成22年3月）、「くんねつぶ保育園に統合」、「ひので保育園」（へき地・平成21年3月）、「あさひ保育園に統合」、「なかのさわ保育園」（へき地・平成10年3月閉園）と改称された。

### ■社会教育関係施設の充実

社会教育・体育施設の大きな整備としては、公民館、図書館、スポーツセンター、温水プールなどである。いずれも文化・スポーツ活動の拠点施設として、住民に待ち望まれた施設であった。

公民館は、昭和26年（1951年）12月に旧役場庁舎を移転増改築して誕生した。同37年（1962年）11月には鉄筋コンクリート造で新築され、地域の会館などと連携した中央公民館として地域の文化活動を推進する役割を担った。さらに現在地に同57年（1982年）、現公民館が建設され、完成後に講堂を使った初公演として、町民がつどい、創る構成劇「わが地・わが町訓子府」が披露されたのである。

図書館は、同26年の旧公民館内に開設した「公民館図書室」（週1回の開室）から始まり、昭和40年代に開室日を増やしたことで利用が活発化。同52年（1977年）には「利用率（現貸出率）全国一の図書館」として図書館専門誌に紹介された。利用や蔵書数が増え、手狭になったことから同59年（1984年）11月に現図書館がオープンした。

同52年ごろから、各種団体による競技スポーツをはじめ体力の維持増進、健康管理などの日常スポーツが盛んになりスポーツ人口が急増。同42年（1967年）に旧訓中体育館を活用した町民体育館と学校体育館が有効活用されてきたが、利用者数の増加などにより同53年（1978年）12月にスポーツセンターが完成した。

町営プールは、同43年（1968年）に栄町に開設された。同47年（1972年）には天幕の屋根を増設したが、温水プールの建設により閉鎖。その温水プール「KAPPA」は、平成7年（1995年）5月3日現在地にオープン。25メートル6コースの日本水泳連盟公認コースをはじめ、充実した設備等で町外からの利用も多数ある。

社会体育施設と公園の機能を備えているのが、レクリエーション公園である。昭和60年（1985年）に協成の21・86ヘクタールの土地を取得し、翌61年（1986年）から造成、12年を費やして開基100年の平成8年（1996年）に全面完成した。

小高い丘陵の頂上には展望塔、その周辺には桜や芝桜、エゾムラサキツツジが春先に咲き誇り、町内外から大勢の見物客が訪れる。丘陵下にはバッテリーカーを備えた子どもたちの広場や、バーベキューハウスと緑地帯。さらに野球場、ソフトボールなどに活用される多目

的広場、スキー場などのスポーツ関連施設もあり、家族連れなどの憩いの場となっている。

※レクリエーション公園にある町営野球場。その3塁側に10人分のベンチがある。これは、日本で最初のドーム球場「東京ドーム」が完成する以前の「後樂園球場」のライトスタンドに設置されていたベンチである。後樂園球場取り壊しに携わった業者の配慮で、「町の新しい球場を利用する人に夢を持たせたい」との関係者の願いが叶ったものである。

#### 第4節 市街地に商店等並ぶ

##### ■信金支店できる

大正元年（1912年）に開局した郵便局で貯金と為替業務を行っていたが、金を借りる方法は、当時野付牛村に銀行はまだなく、質屋や知人からの寸借あるいは、網走の銀行から借りたりしていた。

同2年（1913年）に野付牛に根室銀行野付牛支店（後に安田↓富士↓現みずほ）が開業したあと、次々と銀行の支店が開業し、昭和5年（1930年）に野付牛信用組合（現北見信用金庫）が創業した。北見信用金庫の訓子府支店は、同25年（1950年）に設置開業となったのである。

当時、北見信金は「北見信用組合」の名称で、支店開設は訓子府が初めて。当時の村議会議長・後藤鐵雄宅を仮事務所とした。同26年（1951年）には新店舗が建設され、同40年（1965年）には町の指定金融機関に指定された。同支店は訓子府のまちづくりに大きな影響を与えてきたのである。

◇「義父・後藤鐵雄は、岐阜県出身。訓子府で獣医をしていた。私は昭和25年3月に鐵雄の長男・英夫と結婚し、鐵雄とは10年間同居していた。信金の支店のことは覚えている。住宅を飯店舗にしたが、すぐに信金店舗が建設され、その後自宅は統計調査事務所が別の機関の職員が使っていた記憶がある。鐵雄は人の世話好きだった。また、北海道町村議会議長会の会長を務めていたこともあり、昭和34年の皇太子殿下の結婚式にも招待された」  
(後藤鐵雄の長男・英夫の妻、後藤和子さん談 旭町在住)

## ■商工業の着実な発展と商工会

第二次世界大戦後の訓子府の商工業は、経済の自由化とともに順調に発展していった。昭和26年（1951年）の商工業者数は、151軒だったが、同29年（1954年）には190軒と増えた。特に商業の「雑貨商」は同26年には6店舗だったが、同29年には32店舗と大幅に増えたほか、呉服、小間物、遊戯の店舗も増え、自由な経済活動への意欲が表れている。

商業協同組合、商工会などを経て、商工業者会員の連携による商工業振興と中小零細企業の経営合理化などをめざし、同35年（1960年）、訓子府町商工会が、157の会員数で設立された。初代商工会長には、住吉吉助が就いた。商工会の活動と全国的な好況により、商工業が順調に伸びる一方で、農業人口の減少が始まり、特に小売商業にとって消費者が減少する憂き目にあったのである。

※「商工会」が復活した昭和25年、平塚商店の平塚源三郎が会長に就任した。この時、若手の会

員が毎夜田古健蔵宅に集い、規約の草案づくりや情熱を燃やしていたという。その田古は、明治44年に大工として開業した田古次郎の長男・孫右工門の長男。医薬品・化粧品・小物類を扱う株タフル平和堂を経営していた。

◇「祖父・田古次郎、父・田古孫右工門も大工をしていたが、兄の田古健蔵は薬局を営んでいた。私も店を手伝っていたが、当時の商店街の経営者がよく家に来ていた。健蔵は市街地を盛り上げようと懸命になっていた」

（田古健蔵の弟・田古久さん談 二元町在住）

## ■消費流出の悩み

さらに追い打ちをかけるように、昭和50年代から平成初期にかけ、隣接の北見市に大型店が進出、町内消費の流出が続いた。そうした中、昭和63年（1988年）にまちおこしとして初めて取り組んだ年末年始大売り出しは、以後毎年実施し、商店街の活性化に結び付いた。また、商店街近代化事業を進め、商工会から平成6年（1994年）に設立された商店街協同組合に事業を移管。この事業は、小売商業の経営近代化を図るものである。町や関係機関とともに「街並み整備事業」の一つとして同9年度（1997年度）から本格的な事業が始まったのである。

※「家庭にねもつっている1円玉を出してくださいー1円玉がたいへん不足して、おみせやさんもこまっています。引き出しや貯金箱から明るいところに出して生かしてあげてください（商工会）」。町が発行していた「週報くんねつぶ」の昭和48年7月27日付第313号にこんな記事が載っている。経済状況が急速に進展した高度成長期の昭和30年代後半、自動販売機の普及など

により、硬貨特に1円玉が不足し、国挙げて1円玉を製造したが、増えすぎたことから同43年から製造を控え同48年には全国的に1円玉不足となった。商店などの釣り銭確保の意味から、こんな呼び掛けがあった。平成元年に消費税（3%）が導入されたときにも、1円玉が不足した店もあったという。

### ■食品加工业、建築、鉱業にも大きな動き

開拓初期から盛んだった林産工業をはじめ各種工業もそれぞれの業種で第二次世界大戦前後まで紆余曲折があった。

また、戦後まで、いわゆる「職人技」として、大工、建具、鉄工、電気の工業が発達してきたが、昭和30年代後半から日本は、機械工業、金属工業など新しい設備と技術で急速に発展してきた。訓子府においてもその流れの中にあり、初代の職人たちが築いた「技」は、後継者によって発展、あるいは転業によって新たな道を進むなど時代の流れの中で、訓子府の発展を支えてきたのである。

全国的な外食産業の普及にいち早く目を付けた一人が小野寺勝吉である。小野寺は、同35年（1960年）にリーダーズ食品㈱を誘致するとともに自ら工場を建設。全道で初めてマッシュポテトフ레이크を製造した。その後、道内同種企業との過当競争の中、小野寺がリーダーズの経営を引き継ぎ、製造を続けたが、本業の青果物仲買いに力を入れた。

リーダーズの権利は、森下仁丹㈱が譲渡を受け、北海道仁丹食品㈱を創立するとともに訓子府に乾燥冷凍野菜工場の建設用地を買収する準備を進めたが、同39年（1964年）末に

仁丹食品の販売部門が独立し、フレンチフーズ(株)を設立。さらに同44年(1969年)5月にフレンチフーズはクノール食品(株)に買収された。クノール食品は、同年8月に本社を川崎市から訓子府町に移すと同時にコーン食品(株)に社名変更、平成元年(1989年)に北海道クノール食品、そして同31年(2019年)4月に「味の素食品北海道(株)」に変更した。鍋キューブやコンソメ、コーンパウダーなどを生産、農業をはじめ地域貢献を果たしている。

◇「伯父・小野寺勝吉は優しく、子どものころよく遊んでもらった。豪快かつ繊細な人だった。リーダースを誘致し、訓子府工場を建設したということは、町を活性化させるという意欲が強かったのだろう。父親の勇三も一緒に働いていた時期もある」

(小野寺勝吉の甥・余湖龍三さん談 大町在住)

島貫藤次郎は、住吉鍛冶屋を譲り受け、島貫鉄工場を創業。住吉鉄工場で修業していた八島俊夫が、昭和23年(1948年)に独立し八島鉄工場を創業した。

技術をもった職人から、時代の変化を見通し、経験を踏まえた業態へと転換した人に小澤鐵太郎、男也親子がいる。鐵太郎は、野付牛で製缶の技術を習得し、訓子府でまきストープの製作を中心とする板金業を創業。その後板金に加え自転車販売を行い、訓子府の自転車普及が始まった。同21年(1946年)には戦争から復員した男也が自転車、バイク、家電製品を取り扱いながら商店経営を復活させ、同31年(1956年)に金物と建材を取り扱うこととして(株)小澤商事に組織替えた。

大正7年(1918年)に馬そりなどの製作で宮前吉左エ門が「宮前車輻(しゃそり)製

作所」を開業。その後、次男の敏康が車輛製作所販売所を開業、法人組織などに変更し現在の「宮前車輛工業株」となっている。

◇「祖父・小澤鐵太郎は、私が23歳ころまで同居した。優しいおじいさんだった。野付牛（北見）の国鉄機関区に勤めていたが、第一次世界大戦末期の大正6年ごろ全国的に景気が良く、『公務員なんかやってられない』と自分で商売するため訓子府に移住したようだ。村議をやったほか、商工会の前身の商業組合や農協、信金支店の設立などにも関わった。本業よりも町の経済振興のために活発に動いていたようだ。その分、父の男也が商売で苦労しながらも、自転車やラジオ、テレビなどの家電、建材など先取りした形で販売を始めた。自分の思ったことには一直線、筋が通らないことがあれば、お客さんでもけんかしていた」  
（小澤鐵太郎の孫、小澤男也の長男・小澤和也さん談 大町在住）

◇「宮前車輛で専務を務めていた夫・宮前哲は、吉左工門の四男。吉左工門は石川県出身で、小樽で馬車屋をやっていた。大正7年に訓子府に入り、市街地中心部で車輻製作所を創業した。訓子府に兄弟子がいって『訓子府はいいところだ』ということであたらしい。当時は馬そりや馬車を作っており、その後、馬車の車輪に2トン車のタイヤを着けた保道車を製作していた。私は昭和35年に哲と結婚、その時社長は、吉左工門の次男・敏康だった。保道車を進化させ、耕運機などでけん引する宮前式トレーラーを製作していた。当時、工場の前の道路は砂利道で、敷地との境もなく、材料を道路に置きっぱなしにし、警察などからよく怒られたのを覚えている」  
（宮前秀子さん談 若富町在住）

大正13年（1924年）に久島力松・久忠兄弟は、久島土建事業所を創設した。昭和26年（1951年）に久島木材(株)、同54年（1979年）に久島工業(株)と社名を変更しながら、事業を拡大していった。

同30年（1955年）ごろから日本経済が復興し、町内でも久島工業をはじめ土木建築業者の数、規模が増大していった。このため、業者間の過当競争の弊害をなくし、連携と親睦を深め、町外業者の進出に対抗することなどを目的に、同40年（1965年）ごろ福岡木材旭組、竹村建設工業、久島木材工業、丸建工業、太平木材の6社で訓子府町土建協会が設立され、同61年（1986年）には17社による訓子府町建設業協会と名称を変えて設立したのである。令和2年の会員は、9社である。

訓子府で開発された地下資源は、先に記述したマンガンをはじめ、硫化鉄、石灰などだが、現在は、石灰の採掘だけである。

石灰は、大正期に大谷の丸玉農場で発見された。昭和21年（1946年）に北見石灰工業が元丸玉農場の鉱区を買収したが、3年で事業中止。福岡木材初代社長の福岡惣一郎の弟・福岡興吉が同25年（1950年）に訓子府石灰工業(株)を設立、山元に工場を建設、同29年（1954年）に日ノ出駅北側に新しい工場を建設した。同32年（1957年）には太平洋炭鉱(株)が買収し、「訓子府石灰工業」の名称を継続し経営。その後も事業を拡大するなどし、現在、町内唯一の鉱業としての事業所である。

## 第5節 農試立地、タマネギブーム等、変貌・発展する農業

### ■道立北見農試が訓子府に

第二次世界大戦後の訓子府の農業の大きな動きは、北海道立農業試験場北見支場（現地方独立行政法人北海道立総合研究機構北見農業試験場）の誘致である。

畑作中心のオホーツク地方は、寒地農業確立のため、昭和26年（1951年）に北海道が当時北見市にあった農業試験場の移転拡充構想を発表すると、谷本泰三郎村（町）長は期成会を組織し、農業試験場誘致運動を繰り広げた。北見市、美幌町との三つ巴の誘致合戦を制し、同29年（1954年）、訓子府への移転が正式決定、同34年（1959年）に全面移転完成したのである。

◇「町議会議長を務めていた後藤鐵雄は、木工場など企業誘致をはじめ、農業試験場の誘致にも積極的に関わってきた。このとき、農業試験場と自衛隊の誘致のどちらを進めるか町内が分かれていた話を聞いた。人口が増える自衛隊誘致推進派もいたが、鐵雄は農試誘致で推し進めていたことを覚えている」

（後藤鐵雄の長男・英夫の妻、和子さん談 旭町在住）

※移転の正式決定は、昭和29年だが、三つ巴の誘致合戦が始まった同26年春から半年が経過した10月に全道農業試験場の企画委員会が訓子府移転を決めた。同26年10月5日付北見新聞記事を紹介する。

○農試北見支場争奪戦に断!! 訓子府村に移転 将来は模範農場設置

【道農試北見支場の移転を巡り本春来地元北見市をはじめ美幌、訓子府の一市二町村が候補地をあげて活発な誘致三つ巴戦を展開してきたが、このほど開かれた全道各農試場理事者からなる企画委員会で審議の結果、訓子府村が最適であると結論を見出し道へ具申することとなった】  
運動の実が結ぶ 谷本村長談

【運動の成果が結実、企画委員会で本村に移転決定したことは喜びにたえない】

### ■農業新たな時代・大型機械化へ

農家の経営規模拡大、農産物の生産性向上などにより農家と他産業従事者との所得格差の是正を目的として昭和36年（1961年）に農業基本法が制定された。これにより、本町でも経営規模の拡大が進んだが、一方で離農者も増えたのである。

同40年（1965年）の農家総人口5,657人（946戸）だったが、平成6年（1994年）には2,677人（512戸）と半減。しかし、一戸当たりの作付面積は、昭和40年に5・27ヘクタールだったのが、平成6年には11・71ヘクタールとなり（いずれも農業基本調査Ⅱ現農林業センサス）、このうち20ヘクタールを超える農家は49戸にもなっていた。（令和2年 農家275戸、1戸当たり平均経営面積21・67ヘクタール）JAきたみらい作付け実態調査）

第二次世界大戦前の訓子府の農作業は「畜耕手刈」が基本だったが、昭和30年代に入り全国的に農業用トラクターや動力耕運機、米麦用乾燥機などが導入され、機械化が進んだ。本町では、同40年代前半期に農業用機械の大型化が進んでいった。ただ、同48年（1973年）

の第一次オイルショックで石油価格の高騰により、機械利用の手控えや米の減反政策、冷害などの影響で機械の導入も鈍化した。

こうした中で、同57年（1982年）から平成7年（1995年）にかけて農村総合整備モデル事業が行われ、農業集落道や農業集落排水の整備、農村公園や農村環境改善センターの整備などで、農村環境や生活の改善が図られたのである。

昭和50年（1975年）には、広域農協連のタマネギ倉庫が穂波に建設され、同57年には農協の小麦共同乾燥・調製・保管施設が完成、平成5年（1993年）には馬鈴薯ばれいしょ集出荷施設、さらに栽培・出荷の省力化、作業能率の向上、市場性の向上、高品質をめざし、平成7年（1995年）に「JAくんねつぶ（現JAきたみらい）たまねぎ撰果施設」が完成した。同14年（2002年）には、小麦乾燥貯蔵施設の本格増設、同15年（2003年）に堆肥供給センターも建設され、農協、町が連携して施設整備を進め「農業の町」の発展を後押ししている。

本町では、農業経営の向上と生産の効率化を図るため、農家と町・農業委員会、JAくんねつぶなどをファクスで結ぶ「訓子府町農業情報システム」を同6年度（1994年度）に導入。各農家に端末機を設置し、農家に気象や技術、流通などに関する情報を提供するもので、農家の多様化するニーズに対応している。

※畜耕手刈（ちくこうてがり）＝馬などの家畜を使い田畑などを耕し、鎌などで手刈り収穫する  
こと。

## ■農協デパート完成

昭和23年（1948年）に創立した訓子府農業協同組合の同30年代は、暗渠排水事業、畜産振興さらに農産物の値段を「つけられて」売る立場から値段を「つけて」売る「自主共同販売」の強化などの実績を積み、全国優良農協として表彰（昭和37年）もされた。

同32年（1957年）に購買店舗を移転新築した。ちょうど農協創立10周年の節目で、戦後の経済的に混乱の中を切り抜け、農協が大きく成長するときであった。木造モルタル総2階建てで、店舗壁に付けられた名前は「農協デパート」。

さらに産業組合時代の同14年（1939年）に建てられた農協事務所は、同40年（1965年）に農協ビルとして新築された。鉄筋コンクリート造の3階建て、1階を店舗、2階に事務所、3階が会議室。

以来、訓子府農協は、多くの苦しい時期を生産者とともに乗り越え、さまざまな事業、振興策さらに農業振興計画を打ち出し「農業の町・訓子府」の中核として発展してきたのである。

一方で、第二次世界大戦後の国の緊急開拓により、同20年（1945年）10月から美園や柏丘、福野、西富、常盤に相次いで入植した開拓者が、劣悪な土地条件の下、懸命に開拓を進める中で、同志の団結を図るべく同23年（1948年）に訓子府開拓農業協



同組合を創立。しかし、同40年（1965年）前後から離農者が増え、一時47戸の組合員が同46年（1971年）には14戸と減少、同年2月に解散となった。

### ■タマネギブーム

病害虫などの影響で栽培がなかったタマネギが、昭和29年（1954年）に復活。種の直播から苗の移植へと変わり、同40年代には植え付けから収穫までそれぞれの機械化が進んだ。タマネギブームが起こったのは、同38年（1963年）。日本経済の成長に伴い、国民所得が向上、食生活の洋風化などによるタマネギの普及である。カレーライスやハンバーグ、さらに生食のサラダ、ラーメンなどにタマネギが用いられ、日常の食卓にタマネギが多く登場するようになった。高級野菜とともにタマネギ需要も急上昇し、大量生産へと進み、同46年（1971年）の作付面積は約306ヘクタール（令和2年1、483ヘクタール）J Aきたみらい農作物作付実態調査）となった。

タマネギの植え付けでは、それまでの手作業により株間など目見当で植えていたが、昭和40年（1965年）ごろに八島鉄工場製作の型付機が利用されるようになったあと、同42年（1967年）には、訓子府機械工業株が防除機を開発、さらにこれ以降、タマネギ産地に立地している条件を踏まえ、コンベアー、根切り機、選別台付ピッカー、定置式タツパーなどタマネギの植え付けから収穫に至るまでの機械を開発、生産し輸出もするなど普及、農業機械製作企業として北見地方のタマネギ生産増をはじめ北海道農業の振興に大きな役割を果たしている。

生産者はもちろん、こうした農業機械関係企業さらに優れた品種の育成に北見農業試験場の存在も欠かせない。

◇「当時、八島鉄工場の従業員が他地域で見た機械の製作を父・俊夫に進言し、開発した。前後左右の幅などを目見当でタマネギの種を植えていたが、きれいな列にならないことから、それをきれいにする、等間隔の農工具を開発した。鉄パイプなどを加工し、6列くらいの幅にした工具を人力で畑の上を引っ張り、印のついた箇所種を植えていくもので、成長すると畑はきれいな緑の稜線ができる。町内ばかりではなく、町外からも依頼があり、当時は結構売れたようだ。型付機というより『筋切(すじきり)』と言っていた」

(八島俊夫の長男・八島俊弘さん談 栄町在住)

◇「昭和25年にチップを加工する機械の修理などをする松田鉄工所が創業し、38年に訓子府機工となった。そのころ、タマネギ農家は害虫に悩まされ、防除機を開発を依頼された。そこからさまざまな大型機械を開発、改良し現在に至っている。害虫によるタマネギの被害を見たことがあるが、前日まで青々としていたのに、次の日は一面茶色、全部枯れてしまい、一日でこんなになるなんて驚いた」

(松田和之・訓子府機械工業会長談 東町在住)

## ■くねっぶメロン脚光浴びる

昭和38年(1963年)に北見地区農業改良普及センター(現網走農業改良普及センター)が農家の生活改善の一環として女性層を中心にメロンの試験栽培を開始したが、メロン栽

培の始まりである。同40年（1965年）ころ、金平喜一、宇野忠男の2戸で栽培を開始、同43年（1968年）に5戸の農家が栽培するようになった。

同45年（1970年）、稲作の生産調整で他作物への転換促進事業が行われるようになり、メロン栽培農家が増え始め、「くんねつぶメロン」が北見市場に初出荷された。北見地方でのメロン栽培はなく、道内でも夕張など一部で、大きな話題になった。

同48年（1973年）には栽培農家が18戸に増え、訓子府町メロン振興会が設立された。同60年（1985年）ごろからは、露地栽培からタマネギやビートの育苗用ビニールハウスの有効活用、メロン専用ハウスを建てる農家が増え、平成7年（1995年）には118戸、約18ヘクタールの栽培面積となった。メロン1個1個に生産者名、品種名などを印刷したシールを貼り、個々の生産者が責任をもって消費者に届けるなど、訓子府の特産品として消費者の信頼を高めたのである。

同10年（1998年）には振興会員外も含め約130戸で19ヘクタールの栽培だったが、その後栽培戸数、作付面積が減り、令和2年（2020年）は42戸で約5・3ヘクタールまでに減少した。メロン栽培の後継者難などによるが、メロン振興会（生産者）はじめ、農協、町は、戸数減の歯止めとブランド力強化に努めている。その一つが平成29年（2017年）の「くんねつぶメロン」の商標登録である。町が生産者支援や後継者育成等のために実施した特産園芸作物作付維持事業の中で、メロン振興会が商標登録し、シールにしてメロンなどに貼り、「くんねつぶメロン」をアピールしている。

毎年北見の市場に出荷されているが、同30年（2018年）6月の初出荷では、赤肉「ルピアレッド」5玉入り秀品1箱が過去最高の17万円で競り落とされた。

- ◇「昭和40年ころに水田の一部をメロンの栽培に切り替えた。当時は露地栽培で、もともと温度管理などが難しかったが、20アールほど作付けした。いろいろな方から聞いたり、情報を入手して栽培。なかなかいい味だったので、他地域のメロンと比べようと、小樽までメロンを買いにいき、自分で作ったメロンと比較したが、他地域のメロンの味と引けを取らないことに満足した。昭和45年に訓子府そ菜耕作組合（昭和38年設立）の中のメロン研究会として初出荷、市場関係者から『おいしい』、『こんな良い物をよく作った』と評価を受けるなど話題になった。ただ、高価な作物で、なかなか一般の人が購入しないことで、北見の市場で売りさばくことができず、振興会ができるまでの3年間、釧路の市場にも出荷していたこともあった。天候不順の年があり、実り具合が悪く、出荷ゼロ、収入ゼロの年もあった。市場に出荷するたびに『良い品物だ』との評判で、栽培作業が苦になった思いはなかった」
- （宇野忠勇さん談 栄町在住）
- ◇「メロン振興会ができた年に先進地の夕張に栽培などの研修に行った。3日間ほど研修し糖度の計り方などを学んだ」

（メロン振興会発足時の事務局 田口勉さん談 若富町在住）

## ■集乳合戦

第二次世界大戦後の混乱期、訓子府の酪農業も厳しい状況下に置かれていた。しかし食糧

難が招いた経済情勢は、物価の高騰、下落を繰り返す中、食生活が著しく洋風化し牛乳の消費が増え、昭和27年（1952年）ごろから畑作農業の酪農転換時代を迎えた。同28年（1953年）から同31年（1956年）まで連続した冷害凶作は、多くの農家を打ちのめした。こうした中で「もうけは少ないが凶作はなく、価格の変動も少ない、冬休みがなく、見通しのつく収入がある」など地道に働いてきた酪農民の強さと真価が改めて見直され、「酪農郷訓子府」建設への決定的転機となったのである。

さらに乳業界の好況も酪農を発展させた。食生活で生乳、バター、チーズ、ミルク、アイスクリームなど、牛乳や乳製品の需要が大きく伸びていった。そうした中の同29年（1954年）春、北海道バター社（現雪印乳業）北見工場の集荷区域の訓子府に森永乳業が進出することになり、一大集乳合戦が始まったのである。

酪農生産者は、従来の道バター一本では、「いかに好況時代が来てもわれわれの原料乳価は相手の意のままにされ、訓子府酪農の発展を期することができない」とし、訓子府酪農振興会（昭和17年畜牛組合を改組し設立）の役員が訓子府に工場を誘致できれば町の発展になるとし、工場用地を提供することを決め農協総会に提案することとしたことから、町を二分する「原料乳争奪戦」が繰り広げられたのである。

町内では、道バターと森永乳業との酪農生産者の引っぱり合いだけでなく、酪農生産者の意見も真つ二つ。この争奪戦の調整のため町議会が、町長に対し「区域内の公共的団体などの活動の総合調整を図る決議」を提出、谷本町長に調整を求めるまでに発展した。

結局、生産者の自由意思による二本立て出荷に落ち着き、2社の集乳車が集荷に回るようになった。ただ、酪農振興会から脱退して訓子府町酪農革新会を結成する会員もいるなど、しこりはなかなか解消されなかった。

同42年（1967年）にホクレンのクーラーステーション（集乳車で集められた生乳を工場へ送る前に一時的に貯蔵し、冷却する施設）を開設し運営を農協に委託した。クーラーステーションに町内全酪農家の集乳を推進し、より合理化を図ろうと町酪農協議会が発足、これによって酪農振興会は発展的に解散した。

同40年代中期に乳製品の大量消費が進み、製品の安全性が求められたことから、酪農協議会は、クーラーステーションと連携し、乳質改善に取り組み、同51年（1976年）12月にバルククーラー（生乳を急速に冷却する機械）を各酪農家に設置した。

酪農協議会と別の集出荷体制を敷いていた酪農革新会は、バルククーラーが各農家に設置され、タンクローリーの庭先出荷の体制が整ったことなどから同52年（1977年）3月に両組織が合意し、新たに訓子府町酪農振興会が組織され、現在に至っている。当時の乳用牛飼養は、194戸で4,705頭、平成7年（1995年）には86戸と戸数は減少したが、飼養頭数は5,566頭（いずれも町の乳用牛実査）と伸びている。（令和2年現在 45戸6,131頭Ⅱ町の乳用牛実査）

第二次世界大戦前後からの昭和期、本町の酪農業は大きな浮き沈みを経験しながらも、「酪農・訓子府」の地位を築いていったのである。

まだ訓子府村時代の昭和17年（1942年）に西富・渡邊繁三飼育の乳牛が2歳級世界最高記録牛となった。これは当時、村内外で大きなニュースとなった。同58年（1983年）には、訓子府初のエクセレント牛が福野の安岡牧場で誕生したほか、同年、北海道ホルスタイン共進会で本町から出陳の7頭すべて上位入賞、訓子府酪農史上初の快挙だった。こうした乳牛に関する称号や乳量・乳脂量の日本記録、さらに北海道酪農振興に尽力した酪農者らに贈られる「宇都宮賞」など、今日まで町内で多くの酪農家、育成牛が受賞、記録している。

同42年（1967年）から同45年（1970年）までの4か年事業で美園地区に整備された共同利用模範牧場は、酪農基盤の確立・振興に大きな影響を与えた施設の一つである。また、同38年（1963年）に開設されたホクレン農業協同組合連合会畜産実験研修牧場（現ホクレン訓子府実証農場・駒里）と北海道家畜改良事業団北見事業所（現ジェネティクス北海道）など多くの酪農関係機関・施設の役割も多大なものがある。

◇「共同利用模範牧場開設前後に産業課長を務めていたのは、私のいとこの宮川太一で、私は、産業課の別の係だったので、牧場とは直接関わっていないが、もともとは道の農業改良普及員だった太一は道に顔が利き、役場の産業課長として谷本町長とともに、牧場開設に向けて、道への陳情など設置運動に奔走していたのを覚えている。道との共同牧場いわゆる広域の牧場だから、道の意向が重要だった。町長ら関係者は開設に苦労していた」

（宮川伊三男・元助役 末広町在住）

戦後、農協などが暗渠排水等の土地改良事業に本腰を入れ、町内農家の生産力が大きく向上、トラクターなどの機械導入が進むと耕土改良など土壌の改良へと農業基盤の整備が進むのである。

稲作かんがいを主目的に大正期に組織された土功組合は、同26年（1951年）に訓子府土地改良区として新たにスタート。常呂川頭首工、弥生頭首工などを管理している。常呂川頭首工は、同58年（1983年）の台風で一部被災したが、その後道営災害復旧事業で護岸工事などが行われ、さらに平成元年（1989年）の常呂川河川改修事業で全面改築されたのである。また、弥生頭首工も同54年（1979年）の台風で被災したが、翌55年（1980年）の災害復旧事業で改築された。

## 第6節 鉄道大きな変遷、道路・橋りょう等整備進む

### ■第3セクター鉄道「ふるさと銀河線」誕生

開拓、物流など訓子府の発展に大きな影響を与えた鉄道。第2章で記述した鉄道・網走本線は、昭和から平成初期にかけてさまざまな変遷をたどるのである。

昭和22年（1947年）に日ノ出駅、同30（32年）（1955（1957年））に西富、西訓子府、穂波各乗降場が開設された。同30年にはレールバス、同33年（1958年）にはディーゼルカーが走り、輸送力が大幅にアップし、北見などへの通勤・通学・通院の手段として大きく貢献したのである。同49年（1974年）の訓子府駅乗車人員は、27万人を超えてい

たが、その後自家用車等の普及により、徐々に利用者が減少していった。

同36年（1961年）に国鉄池北線に改称され、国鉄分割民営化により同62年（1987年）に国鉄からJR北海道の池北線となった。この民営化前の同57年（1982年）に「日本国有鉄道経営再建促進特別措置法」に基づき、池北線は第二次特定地方交通線として、国鉄から運輸大臣に廃止対象路線選定の申請が行われたのである。同年の訓子府駅乗車総人員は、まだ20万人を超えており、また、貨物取扱の集約化で、訓子府駅での貨物取扱廃止に係者が苦渋の決断をした中で路線だけは残していこうと「国鉄池北線訓子府町対策協議会」を設置、国、道などへの陳情等、さらに町議会では「国鉄池北線の廃止反対等に関する決議」「国鉄池北線の存続に関する決議」を議決するなど町民一丸となって池北線存続運動を続けた。

池北線沿線の他自治体も同様に存続運動を展開すると同時に、同58年（1983年）に足寄町で沿線住民約800人が参加して国鉄池北線存続沿線住民総決起大会を開き、廃止反対を強力にアピールしたのである。しかし、同60年（1985年）に運輸大臣が廃止を承認したことから、池北線沿線1市6町（北見市、訓子府町、置戸町、陸別町、足寄町、本別町、池田町）の首長と議長による「池北線対策会議」が何度も協議を重ね、池北線が同62年（1982年）に国鉄（日本国有鉄道）からJR北海道（北海道旅客鉄道）に継承されたあとの同63年（1988年）に第3セクターでの存続を検討。その後北海道なども入った「池北線特定地方交通線対策協議会」で池北線の第3セクターによる運営を決定したのである。

平成元年（1989年）2月に、道や沿線自治体などで構成する第3セクター「北海道ち

ほく高原鉄道(株)が発足、路線名は「ふるさと銀河線」として同年6月4日午前9時50分に多くの人に見送られ、満員の列車が北見駅を出発、訓子府駅には約500人の町民が詰めかけた中、午前10時24分に到着、大きな拍手で出迎えた。他の沿線各駅でも開業セレモニーで開業を祝った。

沿線住民が残した「ふるさと銀河線」、開業前の昭和63年(1988年)の訓子府駅乗車人員は16万8,000人だったが、開業効果などで平成元年から同3年(1991年)までは21万人前後を維持、沿線住民の「足」として新たなスタートを切ったのである。

※第3セクター鉄道Ⅱ国や地方公共団体(第1セクター)と民間企業(第2セクター)が共同出資して設立された事業体が第3セクターで、ふるさと銀河線は、北海道と沿線1市6町、沿線の企業や個人が出資して設立された。

### ■町の南北結ぶ橋りよう整備

町内の道路は、昭和27年(1952年)以降、町道の道道昇格、同45年(1970年)以降に町道の舗装化が徐々に進んでいった。

同40年(1965年)に北見置戸線、訓子府相内線、訓子府陸別線、置戸福野北見線、訓子府停車場線、訓子府津別線の6線の道道があり、その後、訓子府相内線と訓子府陸別線を区域変更して1路線として北見白糠線となった。

町道の舗装率は、同45年に0・2パーセントだったが、平成7年(1995年)には45・7パーセントとなり(令和2年61・4パーセントⅡ町の道路現況調査)、自家用車の普及、

輸送時間の短縮など各種産業、住民生活にも大きな変化をもたらした。

昭和45年から同50年（1975年）まで広域営農団地農道整備事業により、南11線の西19号線から西21号線の南岸通（現道道置戸訓子府北見線）まで整備され、常呂川に穂波橋が新設（平成30〜令和2年度修繕実施）され、川南地区と川北地区の交通が一段と便利になった。

※広域営農団地農道整備事業Ⅱ基幹農道の整備により、農産物等の集出荷合理化など消費地へのアクセス改善で優良農業地域の育成を図る目的の事業。

道路整備とともに、橋りようも整備されてきた。昭和46年（1971年）当時、町道の橋りようは72橋で、その半数は木橋だった。自動車の増加や農産物搬出車両の大型化に伴い永久橋化の必要性に迫られた。平成5年（1993年）の町道橋りようは、97橋（令和2年99橋Ⅱ町建設課調べ）に増え、全てが永久橋となった。

平成8年（1996年）時に道道に架かっている橋りようは、現在と同じ44橋。昭和50年8月の台風6号により、旧道道訓子府陸別線に架かる叶橋の橋脚が流出し、復旧工事のあと車両の通行を制限して使用していたが、老朽化が著しかったことから、旧道道訓子府陸別線の区域を一部変更して道道北見置戸線の西25号線から南へ直線に旧路線につなげることになってきたのが「訓子府大橋」で、同53年（1978年）に完成、この路線は、平成6年（1994年）に道道北見白糠線となった。

道路等の整備とともに、自動車の保有台数が増えた。昭和40年（1965年）に町内の自動車は530台だったが、同50年（1975年）には2,869台と5倍以上となり、全道、

全国同様に交通事故も多発した。

町は、同45年（1970年）に交通安全指導員条例を制定し、指導員を任命、交通安全思想の普及等を行い、さらに町交通安全協会（昭和31年発足）が、同46年（1971年）に駅前通りの道道交差点に信号機が設置されたことを機に幼児・児童を集め交通安全現地指導を行い、町民一丸となつて交通事故撲滅を願つた活動を続けている。

道路、橋りよの整備が進む中、開拓から大正時代にかけて農家を悩ませた河川の氾濫防止のための治水事業も行われた。昭和28年（1953年）から網走開発建設部が常呂川築堤と訓子府川改修の計画整備を進めた。常呂川の築堤は、叶橋のたもとから下流に向かい整備。同50年（1975年）の台風と大雨で洪水の被害を被り、網走開発建設部は、同57年（1982年）から同61年（1986年）にかけて、本町域の常呂川日出右岸などの築堤を整備。同年に常呂川第一頭首工（日出）も整備完了、新しい日出橋も完成した。同63年（1988年）には、同35年（1960年）に建設された常呂川頭首工（西富・置戸町川南）を改築着工し、平成元年（1989年）に完成、昭和63年には清住橋も完成した。

訓子府川の改修工事も網走土木現業所（現網走建設管理部）が同30年（1955年）から始め、同40年（1965年）まで、西19号から駒里地区までの築堤を整備した。

鉄道開通、訓子府駅開業により鉄道運送事業者が町内に開業したが、第二次世界大戦後、道路等の整備により、トラック輸送を行う自動車運送業が創業し始めた。

また、同40年代に日本経済の成長からハイヤー利用者が増えてきたが、それを見越したよ

うに同36年（1961年）に訓子府ハイヤーが設立された。初代社長は、父親が経営していた劇場（映画館）を継続して経営していた喜多恒雄。喜多は、ほかに教科書販売事業も行っていたが、2台の車両で営業を開始、乗客が増え続けた同41年（1966年）には5台とした。

その後、自家用車の普及で険しい道のりながらも営業を続け、4代目・宣夫の経営のときに、山田産業株が継続して運営し、町の住民の足確保のための事業「高齢者ハイヤー利用サービス事業」も受けている。

同23年（1948年）に北見バスが訓子府に定期バスを運行させたが、運行状況は順調で同40年代初めには清住線の新設、豊地線の農試周りなどがあり、訓子府から北見へ28回、置戸方面へ13回、農試線6回の運行で、鉄道とともに住民の町内外への大きな移動手段だった。

ただ、同40年代後半にはマイカーの普及や農村地区の人口減少などで、同49年（1974年）には北見―訓子府―置戸―勝山間で上下各23回の運行のみとなった。（令和2年12月現在、末広經由含む訓子府線、置戸線、勝山線、陸別線の4線上下各21回の運行となっている）

豊地・農試線廃止後の昭和49年から町営バスを一日4往復運行したが、利用者の減少で同61年度（1986年度）末に廃止となった。

## ■電話普及、携帯電話の時代へ

町内の電話普及は、昭和41年（1966年）に農村集団自動電話840台が設置されてから加入者が急増し、同55年（1980年）には町内の電話網は完全整備されたのである。

同40年（1965年）には事務用電話が39台、住宅用電話が359台の合計398台だったが、平成5年（1993年）には、住宅用1,819台、事務用529台、公衆用（ボックスおよび赤電話）22台の2,370台となった。

しかし、昭和の終わりから平成の始まりにかけて、携帯電話が普及し始め、平成の30年間に急速に普及さらに機種そのものも進化していったのである。

※農村集団自動電話Ⅱ一つの農林漁業地域で、一定の希望者数があった場合に地域に自動交換機を設置して各家庭に電話を取り付け、電話サービスの提供を受けるもの。

大正期から通信の大きな役割を果たしている郵便局。訓子府郵便局は、戦後、郵便局としての機能が拡大し、昭和33年（1958年）に新局舎を建設、平成24年（2012年）には開局100年を迎えた。この間、昭和27年（1952年）日出地区に「北見日の出簡易郵便局」が開局、同40年（1965年）には、北見農業試験場正門前に「高園簡易郵便局」が開局（昭和47年に廃止）したのである。

訓子府郵便局は、平成17年（2005年）の郵政民営化法の公布により民営化され、現在、「日本郵便(株)訓子府郵便局」となっている。

町民の生活の中で、情報収集と娯楽を兼ね備えたものにラジオがあり、そしてテレビがある。テレビは、昭和39年（1964年）に本町には1、671台の加入があり、1戸に1台の時代を迎えていた。そのほとんどが白黒テレビと思われ、その後カラーテレビへと移行し、白黒テレビは、同50年（1975年）ごろに姿を消していった。

同年にNHKが中継局を穂波高台に設置、平成元年（1989年）には民放のテレビ中継局が設置され、鮮やかなカラー映像が受信できるようになったのである。テレビは、衛星放送も受信できるようになったほか、同23年（2011年）には地上アナログ放送から現在の地上デジタル放送へと移行した。

## 第7節 広域消防で住民の安全・安心

### ■消防の充実

昭和22年（1947年）の訓子府村消防団員条例により、谷本村長より81人の団員に辞令が交付された。団長には仁木善吉が就いた。

同30年（1955年）6月には、北見市、端野村、津別町、相内村、留辺蘂町、訓子府町、置戸町の7市町村で有事の際の相互応援協定が結ばれ、近隣消防団に消火の応援を要請したり、逆に派遣したり協力することとなった。

同年、日出市街に私設日出消防隊が発足、翌年、訓子府消防団日出班となって公設となる。このころから常備団員の駐在はじめ、防火水槽整備、小型動力ポンプ購入などで消防力の強

化を図る一方、同15年（1940年）建設の消防本部・車庫が老朽化、新庁舎の建設を望む声が広がり、同43年（1968年）に高さ20メートルの望楼をもつ新しい消防庁舎を建設、完成したのである。

同40年代に入ると、全国的に道路交通、情報通信網の発達、自動車等の普及で住民の生活圏が市町村の区域を越え拡大、消防業務も広域的な常備体制を確立する必要があり、同47年（1972年）4月に北見市、端野町、訓子府町、置戸町の1市3町による北見地区消防組合が発足、訓子府は北見地区消防組合消防署訓子府支署として、署員7人、北見地区消防組合訓子府消防団として団員63人でスタートした。

平成2年（1990年）、訓子府支署に救急車が配備され、救急業務が開始となり、消防・救急業務体制が整い、同7年（1995年）には、消防団女子部が誕生（令和2年に女性分団Ⅱくるね分団Ⅱに昇格）、住民の防火意識向上の活動などに尽力している。

## ■市街地の大火

戦前は、木工場などの火災、機動力や通信施設がないことで農村地区での大きな火災が発生した。その後消防力が充実したが、市街地では商店や住宅が増え、昭和30年（1955年）、戦後の大火として「仲町大火」が発生した。町民の人気を集めていた劇場「訓子府座」を含め、19世帯77人が被災した。

同36年（1961年）には、戦後2番目の「東町大火」が発生、同38年（1963年）にも東町での大火、さらに同40年（1965年）にも末広町で大火が発生、町の発展とともに、

電気、プロパンガスなど文明も発達、住民の生活様式が変化する中で、充実した消防力と火災との「闘い」があり、より消防施設等の充実や住民の防火意識が高まり、同50年（1975年）以降、「大火」と呼ばれる火災は減少したのである。

◇「訓子府座の火事は、昭和30年の2月。劇場の2階に通じる階段が出火元と聞いている。付近の住宅に延焼したが、虎吉は私を抱いて、親類関係にある仁木薬局まで裸足で走っていた。他の家族も仁木さんまで避難し、しばらくお世話になった。その後、仁木産業があつた東町の長屋に住んでいた」

（訓子府座経営者石峯虎吉の孫・今野峯子さん談 若富町在住）

## ■自然の脅威も

一方、開拓期から続いている自然災害との闘いは、村が町になっても続いている。

村内が戦後の不況真つただ中の昭和22年（1947年）、前年に復旧したばかりの居武士橋が、豪雨で橋脚の一部が流され、翌23年（1948年）の水害では中の沢橋など小河川の橋が流失するなど被害が相次いだ。同年の水害は、常呂川西27号北岸（左岸）の堤防を決壊させたほか、高台からの流れ水を集めた小河川等の氾濫で駅北側など市街地区に濁流が流れ込んだ。

こうした状況から、昭和24年（1949年）に居武士橋のたもとに囚人小屋が建てられ、大阪から送られた囚人90人と看守18人が5月から10月まで常呂川の築堤工事に従事した。

◇「第二次世界大戦後、シベリアに抑留され、昭和22年に帰ってきた。この年に水害があ

り居武士橋が流され、地域の人が修復作業に当たった。こんなことが多数あり、大阪から受刑者と看守が常呂川の治水工事に来たのだらう。地域の先輩から聞いた話では、日の出橋のたもとに宿舎を建てて常川境界付近まで川の切り替え工事を行った。囚人ということで、いろいろと地元民の不安もないわけでもなかったが、受刑者の生活も秩序正しく行われ、5月から10月まで作業を行って帰った。その間、慰安と親睦を図るために、お盆に地元民を交え盛大に盆踊り大会が開かれ、北海道の盆踊りとはまた別な関西方面の変った盆踊りも披露した。また、地元青年団との相撲大会なども開かれたという」

(富山清記さん談 大谷在住)

◇(前段略) こうした中で工事も順調に進み、10月下旬、囚人一行も毎日血のにじむような作業も終わり、大阪刑務所に帰っていきました。日出を流れる母なる川、常呂川に多大な功績を残しながら、現在は近代的に整備されたあの河底に囚人たちの血と汗の塊が残っているような気がしてなりません。

(元網走土木現業所⇨現網走建設管理部⇨技官・斎藤景明寄稿 日出町内会誌より)

同50年(1975年)と同54年(1979年)には台風の影響により、床上・床下浸水が相次ぐなどの被害があり、こうした自然との闘いは、平成以後、「世界的な異常気象」との闘いとして続いているのである。

農作物にとっては、水害のほか異常低温や干ばつさらに霜やひょうなども収穫に大きな影響を与える。昭和期は、低温による冷害凶作が多かった。同39年(1964年)には大霜で

凶作、特に美園地区住民の生活に影響を及ぼした。同51年（1976年）には、役場に霜害予防と冷害の対策本部が設けられ、くん煙を実施するなど同50年（1975年）代は冷害凶作の年が多く、平成2年（1990年）と同19年（2007年）には集中豪雨と降ひょうで多くの農作物が打撃を受けたのである。

◇冷害続きだったころ、特に山村では被害が大きく、39年、訓子府町美園小学校へ取材に行くと、弁当を持って来た子は教室で黙々と食べ、持って来れなかった子は寒風の中グランドで頭をたれ静かに歩いていた。窓越しにその姿がいじらしく、弁当を持たせられない親の心が思われた。その実態を全中（全国中継）ニュースで放映すると、全国から多くの温かい善意の金品が学校に寄せられた。

（菅原政雄編 北見叢書2「NHK・北見の放送50年」 中山繁次郎談より）

◇昭和37年6月30日午前5時半、その日は、日の出が4時20分ごろだと記憶しているが、大変晴天の朝日の出であった。しかし、日の出の割合に、西の空よりどんよりと次第に暗くなり、9時ごろになると雨も降らず、曇天模様は夕闇のごとく、薄暗くなっても雨が降らず、何事か世の中に起こるか不安になった思い出がある。そのうち雨ならず、砂のようなものが不気味な音と共に降り始めて二度びっくりである。昼ごろになって、昨夜十勝岳が大噴火を起こしたことが知らされた。灰が降ってきて、ビートをはじめ一切の農作物に降りそそぎ生育には相当被害を受けた。

（大谷実践会「オロオムシ開拓誌」より）

## ■交通安全宣言と防犯宣言

昭和29年（1954年）の新警察法により、本町の駐在所は北海道警察北見方面北見警察署の管下に置かれた。このとき、町内には訓子府巡査部長派出所（現訓子府駐在所）と日出巡査駐在事務所があったが、日出駐在は同43年（1968年）に閉鎖された。

全国的に交通事故が増加し始めたことで、町議会は、同37年（1962年）4月5日の臨時議会で「町民一人一人の交通安全の意欲を高める」と、「交通安全の町」宣言を可決、また町は、町交通安全町民運動推進委員会（現町交通安全推進委員会）を組織し、全町民一丸となった取り組みを開始した。

さらに町は、同45年（1970年）に町交通安全指導員を任命。推進委員会、町交通安全協会（昭和31年設立）、指導員とともに「交通事故死ゼロの日目標毎日」を掲げ、同60年（1985年）と平成8年（1996年）に「交通事故死ゼロ1000日」を達成した。

※令和2年には「町民による交通事故死ゼロ3500日」（5月27日）、「町内での交通事故死ゼロ3000日」（12月1日）を達成した。

防犯に対しても、町防犯協会（昭和24年設立）、町暴力追放推進協議会（同59年設立）が活発な活動を展開、同63年（1988年）には、町議회가「明るく住みよい町」の実現のため「防犯宣言に関する決議」を行った。

## 第8節 保健・医療・上下水道等生活環境充実へ

### ■健康センターから「うらら」へ

#### ・健康センター

母子健康対策の強化を図り、母子保健向上発展に向ける国の福祉政策により、農山漁村に母子健康センターの設置を進めることとなり、昭和34年（1959年）に道内2か所が割り当てられ、そのうちの1か所が訓子府町に決定した。旧役場庁舎の分室として設置され、同45年（1970年）には大町に移転新築され、保健指導部門と助産部門を区分して運営した。同60年（1985年）には、助産施設が廃止、その後は健康センターと改称し、一般地域住民の保健活動を行ってきたのである。

#### ・うらら

平成13年（2001年）に新役場庁舎と併設して総合福祉センター「うらら」が開設されると、健康センターは廃止、その後福祉団体が建物を利用したが、同21年（2009年）に解体された。

町の保健活動で特筆すべきは、結核予防活動で、昭和55年（1980年）には過去3年間の結核受診率が96パーセントと高率で、財団法人結核予防協会から表彰を受けている。

#### ・社会福祉協議会

昭和26年（1951年）に発足した社会福祉協議会は、同63年に社会福祉法人として認可され、総合福祉センター内に事務局が入った。

社会福祉協議会は、高齢者や障がいのある人などのための各種サービスを実施している。各種ボランティア団体、町等と連携し、地域に密着した福祉活動を推進している。

### ・医療機関

訓子府の医療機関は、開業、廃業等が繰り返されたが、大正12年（1923年）に開業した柳橋医院は、昭和45年（1970年）までの48年間にわたり町内の医療に従事した。さらに学校医として児童生徒の健康、体位の向上にも尽くしたのである。

また、同29年（1954年）には水元勇三が水元医院を開業、長男・勇一が引き継いだ。平成元年（1989年）1月に急逝し閉院した。昭和38年（1963年）からは、湯本博敏が東町に医院を新築、開業し同59年（1984年）8月に急逝し閉院。両医院ともに長年にわたり、訓子府で地域医療に尽くした。

同36年（1961年）から同42年（1967年）まで訓子府駅前に松原医院が開業。同63年（1988年）には山崎幹雄が院長として訓子府クリニックを開業し、平成2年（1990年）に伊東周作が院長となり、現在に至っている。また同3年（1991年）にくんねっぷ治恵クリニックが開業したが、同24年（2012年）に閉院した。

歯科医院は、昭和21年（1946年）に市岡勝が開業し、以後多くの歯科医師が開業したが、現在は2歯科医院となっている。

湯本歯科医院は、同60年（1985年）11月に旧湯本医院跡で湯本敦が開業。平成17年（2005年）には、くるねっぷ歯科が開業したが、同21年（2009年）にはハート歯科とし

て開業、同23年（2011年）から工藤宏之が診療に当たっている。

### ■くんねつぶ静寿園誕生

社会福祉として切り離せないのは高齢者問題である。人口の65歳以上の占める割合、高齢化率は、昭和30年（1955年）の国勢調査で4・6パーセント（503人）、同55年（1980年）時に10・1パーセント（785人）と二桁台となり、平成22年度（2010年度）には30パーセントを超えた（令和2年5月末住民基本台帳によると1,880人、38・9パーセント）。高齢者の数は、全人口の減少に反して増えている。

こうした状況の中、高齢者の生きがい活動などの拠点となるのが老人クラブである。昭和36年（1961年）に穂波地区に初めて設立され、平成8年（1996年）時には21のクラブ、1,101人の会員となり、連合体の老人クラブ連合会ははじめ単位クラブでもスポーツや社会奉仕活動など活発な活動が行われている。

しかし、近年は会員数が減少（令和2年4月1日現在21クラブ548人）し、活動が縮小するなど、活動維持に懸命になっている。

長寿社会の中で、町を挙げて進めてきたのが特別養護老人ホーム「くんねつぶ静寿園」の設置。「お年寄りは、多年にわたり社会の発展に貢献された方々であり、老後はみんなに敬愛され、明るく不安のない生活を送っていたただかなければなりません。この施設は、お年寄りの中で身体上または、精神上の障がいで日常生活に常時の介護を必要とする方に入所して

いただき、家庭に代わってお世話し健康で明るく楽しい生活を送っていただくこと」を目的とし、平成2年（1990年）に完成、社会福祉法人訓子府福祉会が運営している。静寿園には在宅老人デイ・サービスセンターを併設、同10年（1998年）12月には「ケアハウス」ほなみが完成した。同26年（2014年）には、静寿園の増床が行われ、定員が50人から60人となり、入所希望者増に対応した。

### ■上下水道とごみ処理問題

上下水道の普及さらにごみ処理関係は、町民の日常生活には欠かせないことである。

#### ・上水道

昭和30年（1955年）1月1日から町初の簡易水道が給水を開始したときは、200戸、1,000人の給水状況だった。

その後、水源地の水不足により、新水源地を求め調査を開始し、オロムシ川上流の湧水場所を水源地とし、約6・5キロメートル離れた貯水池（平成10年度大谷浄水場として新築）に送水、昭和49年（1974年）12月に貯水池から訓子府市街、日出市街さらに実郷、末広町へと給水が行われた。

入植以来「無水地帯」として水不足に悩まされていた高台地区では、道営営農用水事業により昭和46年（1971年）から柏丘、駒里など6地区120戸に給水され、その後も給水戸数を増やすなど、無水地帯は解消された。現在は、老朽管の更新等を随時進めている。

## ・下水道

下水道整備は、同62年（1987年）に住民の間から早期着工について要望があり、農業を基幹とする訓子府町は、農業集落排水事業で整備された。平成4年（1992年）に徳波に訓子府町農業集落排水管理センターが完成し、市街地区の下水道が供用開始となり、同9年（1997年）には実郷に末広地区農業集落排水処理センターが完成、さらに同11年（1999年）には日出地区農業集落排水処理センターが完成、それぞれ供用開始された。同年度からは個別排水処理事業がスタートし、農家地区の水洗化を進めている。

## ・ごみ処理関係

「本年2月5日に、煙突中間部の排ガスおよび取出口の焼却灰を、それぞれ採取して調査した結果、排ガスに含まれているダイオキシンは、130ナノグラムであると確認されました。この数値は、何らかの施設改善などの措置を必要とする一定の基準値を上回る数値であります。今後、保健所とも協議しながら適切な対応に努めてまいります」。同9年5月7日、第2回臨時町議会冒頭、深見町長の行政報告である。

※ダイオキシン $\parallel$ 物を焼却した際に自然にできる有毒物質で、ごく微量だが環境中に広く存在する。

※ナノ $\parallel$ 1ナノグラムは、10億分の1グラム、当時の厚生省（現在は環境省所管）暫定基準値は80ナノグラム。

昭和43年（1968年）に始まったごみ収集処理事業は、長年の懸案事項であった。当初

の埋め立て処分地が限界に達したことから駒里の町有林内に近代的設備の一般廃棄物埋立処理施設を同62年（1987年）に建設。

町は、ごみ処理場を一年でも長く使用できるように、ごみ焼却炉を平成4年（1992年）に弥生に建設するとともに、資源ごみなどの廃品回収を町内会やこども会などに一層協力を求めるなどごみの減量化を図っていた。

しかし、このごみ焼却施設からの排ガスのダイオキシン濃度が国の基準値を上回っていることが同9年の調査で分かり、焼却施設の稼働を同11年（1999年）に休止、周辺を廃棄物処理場としてごみを埋め立て処理（資源ごみおよび有害ごみは他町へ搬送）していた。

これが同16年度（2004年度）からは、ごみ分別をさらに細分化し、すべてのごみを種類によって他市町の施設へ搬送、処理している。

### ■過疎対策、定住推進の宅地分譲

住宅施策は、昭和30年（1955年）から進め、令和2年（2020年）4月1日現在、公営住宅が99棟353戸あり、建て替えや改修などを進めている。そうした中で、過疎対策の一環として定住を目的とした団地の造成が行われた。平成9年（1997年）9月に分譲を開始した末広町の「あけぼの団地」さらに、平成12年（2000年）に分譲した日出の「あさひ野団地」。それぞれ26区画分譲し、早期に完売、住居が建ち並んでいる。

また、若年層の住居確保のため、平成5年から若年単身勤労者住宅を建設、令和2年（2020年）12月現在3棟36戸がある。

## ■温泉が噴き出た

「温泉が出たぞー」。平成元年（1989年）9月上旬の各新聞に「訓子府に温泉」「町民沸く」などの見出しが躍った。現在のくんねつぶ静寿園東側の地下1、200メートルで湯脈を掘り当て、くみ上げた瞬間だ。温泉は、近くのくんねつぶ静寿園で活用しているほか、町温泉保養センター（平成3年1月開館）を建設し活用、現在も町民のくつろぎの場となっている。

温泉は、町民有志の提言があり、町は道立地下資源調査所に温泉脈調査を委託。町内各所を調査した結果、温泉開発の可能性が高い穂波地区で同元年6月からボーリングを実施し掘り当て、同年9月3日からくみ上げた。温度50度、湯量毎分80リットル。道立衛生研究所の分析の結果、9月29日付で「温泉」と認められた。無色透明、ほとんど無味無臭で、泉質は、ナトリウム、炭酸水素塩、硫酸塩、塩化物泉（弱アルカリ性低張性高温泉）の「天然温泉」とのお墨付きである。

町内の浴場は、大正・昭和期に「松の湯」が町民の風呂として生活を支えてきた。大正10年（1921年）に札幌から移住した新見貫一が同11年（1922年）に始めたが、昭和35年（1960年）以降の住宅ブームで大衆浴場の利用も年々減少し、平成3年（1991年）にのれんを下ろした。

温泉保養センターは、「松の湯」の後を継ぐように「大衆温泉浴場」として町内外からの人気が高い。オープン初年度の同2年（1990年）は、開館日数が少ないものの1万6、

000人を超え、1日平均は256人。同3年度は約5万5,000人で一日平均177人、以後180人前後で推移していたが、同16年(2004年)にリニューアルオープンすると再び一日平均200人を超えたのである。近年は一日平均130人前後で推移しているが、同19年度(2007年度)は北見市の大規模断水の影響で約5万5,000人、一日平均175人が利用し、にぎわった。

◇「地域経済活性化のため、さまざまな活動をしていた新産業開発審議会が温泉ボーリングを町に提言した。それが今の温泉保養センターの建設と活用につながっている。これも町の活性化の一つとして提言したものだ」  
(富山力さん談 末広町在住)

※昭和30年代に訓子府川河畔で「湯の花」(沈殿した温泉成分)を見た町民がいたという話や、真冬でも凍らないところがあったという話があり、温泉湧出の期待が古くからあったようだが、実際は定かではない。

### ■姉妹町交流等盛ん

本町と現在、姉妹町交流しているのは、高知県津野町である。平成13年(2001年)に姉妹まち締結し、以来交流が続けられている。締結してから約20年とまだ浅いが、高知県とのつながりは120年以上となるのである。

本町を開拓、発展させてきたのは、明治30年(1897年)の高知県からの北光社移民団である。本町では、開基100年(平成8年)のときに、開拓先人の故郷・高知県と記念碑の交換事業を行いたいと、平成5年(1993年)に高知県知事に交流の意思のある市町村

を打診した。その結果、当時の東津野村（同17年に葉山村と合併し現津野町）から意思表示があったことから、両町村の交流が始まった。

開基100年記念事業の一環として、両町村の石を交換、訓子府では中央公園に東津野村の石で建立した「開拓感謝の碑」が建立され、東津野村長ら100年記念式典に出席した関係者参列の中で除幕が行われ、さらに東津野村の津野山古式神楽が披露された。

同13年（2001年）には、東津野村で「姉妹まち」締結調印が行われ、本格的な交流が始まったのである。小学生の相互訪問はじめ、町民レベルの訪問や職員の人事交流などが続いている。

これより先、昭和63年（1988年）に茨城県関城町（平成17年近隣1市2町と合併し現筑西市）と「教育姉妹町」の締結をした。交流の始まりは、同49年（1974年）で、町内の青年3人が北見地区の他市町の青年とともに、先進地研修として関城を訪問したのが始まり。

平成17年（2005年）の合併で筑西市となるに伴い、教育姉妹町としての交流に幕を閉じた。ただ、広報誌の交換交流は現在も続けているほか、同20年（2008年）には、旧関城町に「関城町・訓子府町交流記念の碑」が建立された。

#### ・ふるさと交流

本町出身の人が他市町村でふるさと会を組織した。美幌くんねつぶ会、札幌くんねつぶ会、東京くんねつぶ会である。現在も活動を続けているのは、札幌くんねつぶ会である。

札幌くんねつぶ会は、昭和53年（1978年）会員131人で発足した。故郷・訓子府を離れ、札幌市や道央圏で活躍する人たちが、交流、親睦を図りながら訓子府との交流を図ることを目的とし、毎年総会を開催し、40年以上活動が続いている。

美幌くんねつぶ会は、同57年（1982年）に美幌在住の35人の会員で発足、同年会員7人が訓子府を「ふるさと訪問」した。

東京くんねつぶ会は、同55年（1980年）に発足、平成2年の創立10周年の節目には、会員子弟が来町するなど活動を続けていたが、一時休止状態となった。平成22年（2010年）に東京訓子府倶楽部として再結成、同26年（2014年）に第2回目の懇親会を東京で開催した。町制施行60周年の同23年（2011年）に同倶楽部会員の久島和夫弁護士が「おかえりなさい先輩」事業で、母校の訓子府小学校で特別授業を行った。

町は、同20年度（2008年度）に「ふるさと応援団」事業、翌21年度（2009年度）に「ふるさと納税」制度をそれぞれ開始、多くの会員が応援団員として（令和2年12月末現在526人）、遠くからふるさと訓子府のまちづくりに参画している。

## ■大火！いやオーロラだった

気象庁が昭和33年（1958年）3月にまとめた「気象要覧第703号」に「特殊気象オーロラ観測」のタイトルで「1958年2月11日夜、18時ごろから23時過ぎまでにわたって、北海道、東北、北陸、信越、関東の各地で著しいオーロラが出現したのを観測した。網

走と秋田の両地方気象台ではこのオーロラを写真に撮影したが、日本でオーロラの写真を撮影したのはこれが初めて」と記されている。また、「網走地方気象台」の項に「18時20分ごろ北の空に火事のような薄い暗赤色の光が出現した。この光は次第に明るくなり19時42分にも最も明るく、その後次第に衰え23時05分積雲にさえぎられ観測不能になるまで観測された」とある。

「訓子府」との記述は出てこないが、北海道の広い範囲で観測されたことや、当時町内で実際見たことがある人もおり、訓子府の上空でも見ることができたようだ。

◇「10歳くらいのころに、オーロラを見た記憶がある。昭和30年代の初めのころだと思いが空が真っ赤になった。父親が駅北側の太平木材に勤めており、住宅もそばにあった。夕方、住宅の前で家族みんなで見た」  
(後藤田倫子さん談 北見市在住)

◇「小学校の低学年のときだったと思うけれど、市街のほう、北の空が真っ赤になった。大火だと思った。確か消防車なども出て大騒ぎになった記憶がある。次の日にオーロラと聞いたけれど、その当時のことは強烈な印象が残っている」

(伊藤文男さん談 緑丘在住)

## ■五輪聖火リレーに訓子府からも参加

昭和47年(1972年)2月3日に札幌冬季オリンピックが開幕した。開幕前に道内各地で聖火リレーが行われたが、開幕10日前の1月24日に置戸市街でも聖火リレーが行われ、訓子府町からも13人のランナーが参加し、オリンピックのPRに一役買った。

◇「聖火のトーチは長く、重たかった。訓子府のメンバーは、正走者が自分で、副走者2人、随走者10人。事前に五輪マークの入った上下のウエアが支給され、それを着て走った。置戸のチームから引き継いだ、走ったのはわずかな距離だった。ただ、冬の冷たい風が吹いており、トーチの火を点火するときにはウエアの袖を焦がしたのはよく覚えている」

(前田正隆さん談 清住在住)

### ■ ソーラーカーレースに参戦

町を挙げて楽しむイベントに、夏の「ふるさとまつり」、冬の「さむさむまつり」などの祭りがあるが、若手を中心に平成4年(1992年)に組織した「くんねっぷソーラーカーを走らそう会」がソーラーカー「大地くん」を製作、翌5年(1993年)に北見市と本町の公道を使って開かれた「ソーラーチャレンジin北海道1993」(2回目)に初出場、その後会場を北見市の河川敷に移し、平成15年(2003年)の第6回大会まで5回出場し、大地くんは太陽電池の容量などでクラス分けをしたBクラスで優勝、準優勝を記録するなどの成績を収め、町内を大いに盛り上げたのである。

### ■ ボウリング場もあった

昭和47年(1972年)に町内にボウリング場が誕生、その開設は町民が歓迎したものである。



全国的に流行し、道内でも1市町村1ボウリング場という雰囲気がある中、福岡木材社長の福岡武ら10人の町民有志が、出資し「株式会社訓子府ボウル」を設立、「フレッシュボウル」の名称で10レーンを有するボウリング場は、3年間の運営だったが、にぎわいを見せた。

◇過疎化が進む北見近郊町村では若者の流出阻止の願いも込めて町民一体となってボウリング場建設を行っているところもあるほど。フレッシュボウルの落成は関係者はもとより町民挙げて歓迎、期待している。  
(北見毎日新聞 昭和47年7月5日付より)

◇「全国的に景気が良い時代で、人口も減少傾向の中、娯楽と町に活気をつくろうと、ボウリング場設置に10人が立ち上がり、株主の一員として加わった。ただ、オープンしたときは、東京など中央ではボウリングブームは下火になっていた。3年目には利用者も少なく、廃業した。人口8,000人程度では成り立たなかったのでは。3年間の営業だったが、今となつては楽しい思い出の一つ。ボウリング場の建設のときにゴルフ場の誘致の話も浮上していたが、青写真のまま消滅した。その後、ボウリング場を買収し、スーパーマーケットとして開店した」

(ボウリング場を建設するための有志10人のうちの一人・富山力さん談 末広町在住)

### ■開基1世紀〜盛大に記念式典

「ドドーン、ドーン」。平成8年(1996年)1月1日午前0時、夜空に色鮮やかな火花が映し出された。開拓から100年の大きな節目の幕開けだ。中央公園に多くの町民の声が響き、公園内に設置された仕掛け火花が「A HAPPY NEW YEAR 100TH

KUNNEPPU」の文字を浮かび上がらせた。先人が開拓の鋏を打ち下ろしてから100年目に突入した瞬間である。

この年、11月1日の記念式典を挟み、多彩な記念事業が繰り広げられた。桜や町木「オンコ」などの記念植樹、タイムカプセル埋設、小学生の高知県派遣や中学生の海外派遣、さらに町開基2世紀への架け橋として新しい叶橋が完成、渡橋式も行われた。1年を通して、町開基1世紀を祝い、未来への発展を誓ったのである。



平成8年1月1日午前0時、  
仕掛け花火で開基100年の幕開け